

太宰治「浦島さん」の成立について：「続浦島子伝記」を中心に

劉, 金宝
九州大学大学院比較社会文化学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1456045>

出版情報：Comparatio. 17, pp.40-49, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

太宰治「浦島さん」の成立について

―「続浦島子伝記」を中心に―

劉 金宝

はじめに

「浦島さん」は昭和二十年に刊行された太宰治の「お伽草紙」に収録された四つの物語のひとつである。「お伽草紙」は「前書き」と「瘤取り」、「浦島さん」、「カチカチ山」、「舌切雀」の四つの物語からなる。終戦直前に、ある父が防空壕の中で五歳の女の子のために絵本を読んで聞かせたという設定で、四つの物語は子供に読んでやった内容である。

太宰治は、「瘤取り」の書き出しで「この瘤取りの話に限らず、次に展開して見ようと思う浦島さんの話でも、まず日本書紀にその事実がちゃんと記載せられているし、また万葉にも浦島を詠じた長歌があり、そのほか、丹後風土記やら本朝神仙伝などというものに依っても、それらしいものが伝えられているようだし、また、つい最近に於いては鴉外の戯曲があるし、逍遙などもこの物語を舞曲にした事はなかったかしら、とにかく、能楽、歌舞伎、芸者の手踊りに至るまで、この浦島さんの登場はおびただしい」（注1）と書いて、「浦島さん」の原典として、『日本書紀』、『万葉集』、『丹後風土記』、『本朝神仙伝』、『森鴉外の戯曲』、『逍遙の舞曲』などを列挙しているが、太宰治が、これらの本を実際に読ん

だかどうかについては疑問が残る。読んだとしても「むかし読んだ筈」の本で、「おぼろげな記憶」が残っていただけなので、「浦島さん」に与えた影響は限られているだろう。

本稿では、太宰治との関連について先行研究でまったく言及されていない『群書類従』所収の「続浦島子伝記」を中心に、「浦島さん」の成立について、考察してみたい。

一、室町時代以前の浦島説話

重松明久の論（注2）に依ると、浦島説話は室町時代になってから、明らかな変容を遂げ、主人公の名前は「浦島子」から「浦島太郎」へ、物語の舞台は「蓬莱山」から「龍宮城」へ移り変わったようである。室町時代以前の浦島説話の舞台は「万葉集」における「海若の宮」のほかは、すべて「蓬莱山」に設定されていたが、室町時代に入って説話の舞台が一変し、「蓬莱山」は一向現れず、代わりに「龍宮城」が現れる。太宰治の「浦島さん」においては、「蓬莱も龍宮も同じ様な場所なんだから」という表現がある。室町時代以前の舞台であった「蓬莱」が出てきて、「龍宮」と同一視しているのが、「浦島さん」の執筆に際して、太宰は室町時代以前の浦島説話を参照したのではないかと推測される。

一方、室町時代以前の主人公の名前は「浦島子」である。この「浦島子」の「子」という文字は中国から影響を受けたのではないか。古代の中国で、聖人とか神仙とかの名前に「子」という文字をつけて、尊敬の意を表わすのはありふれた現象であった。例

えば、聖人の場合は孔子、老子、莊子など教え切れないほどある。名前に「子」という字が付いている神仙は、「列仙伝」では、赤松子、寧封子、老子、涓子、幼伯子、崔文子、犢子、赤鬚子、邗子が見られる。また「神仙伝」では、広成子、墨子、天門子、玉子、北極子がある。室町時代以降、主人公の名前は一変して、「浦島太郎」に変わった。この「太郎」という字は男または長男の名前に付けるだけで、格別な尊敬の意は込めていないであろう。それに対して、太宰治の「浦島さん」というタイトルにおける「さん」は苗字の後に付けて、尊敬を表わしており、室町時代以前の「浦島子」の「子」に依ったのではないか。この「浦島さん」というタイトルにおける「さん」は太宰治は室町時代以前の浦島説話を参照したことを傍証していると思われる。

また、先行研究では言及されていないが、「浦島さん」において、

亀の甲羅に浦島が腰をおろしたとみるみる亀の背中はひろがって畳二枚くらゐ敷けるくらいの大さになり、ゆらりと動いて海にはひる。汀から一丁ほど泳いで、それから亀は、「ちよつと眼をつぶつて。」ときびしい口調で命令し、浦島は素直に眼をつぶると夕立ちの如き音がして、身邊ほのあたたかく、春風に似て春風よりも少し重たい風が耳朶をなぶる。(『太宰治全集』第八卷、筑摩書房、一九九八年十一月、三二五頁。以下の「浦島さん」の引用は同書により、頁数だけ示す。)

「ちよつとまた眼をつぶつて。」亀は厳肅な口調で言ひ、「ここはちやうど、龍宮の入口になつてゐるのです。人間が海の底を探検しても、たいていここが海底のどんづまりだと見極めて引き上げていくのです。ここを超えていくのは、人間では、あなたが最初で、また最後かも知れません。」ごうといふ凄まじい音と共に烈風の如きものが押し寄せて来て、浦島はもう少しで亀の背中からころげ落ちるところであつた。(三二八頁)

という描写がある。このような異界に行くに当たって目を瞑らないといけないというモチーフは室町時代以前の浦島説話によく現れる。

『丹後風土記逸文』の「女娘教令眠眼」（女娘が眼を瞑らせて）、『古事談』所収の「浦島子伝」の「願合眼」（眼を閉じてほしい）、『群書類従』（注3）所収の「続浦島子伝記」の「願令眠眼」（眼を瞑ってほしい）、『扶桑略記』の「君暫可眠」（暫く眼を瞑って）などがそれである。それに対して、室町時代以降の浦島説話に「眼を瞑る」というモチーフはまったく出て来ない。つまり、太宰治は室町時代以前の浦島説話を読んで、「眼を瞑る」というモチーフを引用したのだと考えられる。

室町時代以前の浦島説話といえば、『日本書紀』、『万葉集』、『丹後風土記逸文』及び『古事談』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「続浦島子伝記」、『帝王編年記』（雄略天皇二十二年秋七月条）、『扶桑略記』（雄略二十二年七月条）、『本朝神仙伝』などが挙げられる。

しかし、周知のように、『日本書紀』、『帝王編年記』と『本朝神仙伝』における浦島子に関する叙述は（漢字でそれぞれ五四字、一九八字、二〇四字で）きわめて短くて簡単なものである。「浦島さん」の出典について、太宰治は『日本書紀』と『本朝神仙伝』に言及しているが、二書から影響を受けた所は見られない。また、太宰治は『万葉集』の巻第三に掲載された柿本人麻呂の歌「飼飯の海の庭良くあらし刈り薦の乱れて出づ見ゆ 海人の釣船」の後半部分をそのまま引用しているが、それ以外に、「浦島さん」に影響を与えた所は見つからない。そうすると、『丹後風土記逸文』、『古事談』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「浦島子伝」、及び『扶桑略記』の五点の何れかを参照したと考えられる。

一体太宰治はどれを参照したのかと言えば、『群書類従』所収の「続浦島子伝記」ではないかと思われる。

『群書類従』所収の「続浦島子伝記」は、重松明久が「浦島子伝」において指摘しているように、中央官僚としての坂上高明が職務の余暇に当時かなり流布していた「古事談」所収の「浦島子伝」に基づき、美辞麗句の厚化粧を加えたものである。作者の坂上高明は延喜二十年（九二〇）に大体の骨組みとして「古事談」所収の「浦島子伝」を潤色し、さらに末尾に七言二十二韻の詩をそえ、最初の「続浦島子伝記」を作り出した。そして後の承平二年（九三二）に、浦島子関係十首、亀姫関係四首の計十四首の和歌を追加した。このように二次的に成立したこの伝記の冒頭に、作者は二次的成立の時点としての年月日と勤務場所を序文として

追記しようである。

二、太宰治の「浦島さん」と『群書類従』所収の「続浦島子伝記」

次に太宰治の「浦島さん」と『群書類従』所収の「続浦島子伝記」に共通する表現、及び似ている描写を挙げ、両作を比較してみたい。

▼浦島に関する描写

①そこにわが浦島太郎が住んでゐた。もちろんひとり暮らしをしてゐたわけではない。父も母もある。弟も妹もある。（中略）先祖伝来の所謂恒産があるものだから、おのづから恒心も生じて、なかなか礼儀正しいものである。（三二五頁）

一天之蒼生為父母。四海之赤子為兄弟。形似可咲。而志難奪者也。（川俣馨一編『新校群書類従』第六卷 内外書籍株式会社 昭和六年十月 四七〇頁 以下の「続浦島子伝記」の引用は同書により、頁数だけ示す。）

（天下の百姓を父母として、あらゆる修養のある人を兄弟とする。容貌が劣るが、志気は揺るがないものである。——拙訳）

主人公の生い立ちについて、ほとんどの浦島説話では、家族構成については触れず、出身地が丹後であることだけが述べられている。しかし、「続浦島子伝記」には「一天之蒼生為父母、四海之

赤子為兄弟（天下の百姓を父母として、あらゆる修養のある人を兄弟とする）という描写がある。主人公の人格の高尚さを述べているくだりである。真の兄弟がいるかどうかは分からないけれども、「父母」と「兄弟」という言葉が現れる。一方、「浦島さん」に「父も母もある。弟も妹もある」という描写があるのは「続浦島子伝記」を踏まえたのではないか。

また、主人公の性格に関する描写では、「浦島さん」において、「先祖伝来の所謂恒産があるものだから、おのづから恒心も生じて」と表現している。「恒産なき者は恒心なし」という成句に拠ったのであろう。一方、ここにおける「恒心」と「続浦島子伝記」における「志難奪」（志気は揺るがない）は意味合いにおいて似ていると言えるであろう。

②「あれ、あなたはまだ草履をはいてゐるね。脱ぎなさいよ、失礼な。」

浦島は赤面して草履を脱いだ。はだして歩くと、足の裏がいやにぬらぬらする。（三三二頁）

「さかなの世界には、床なんてものには必要がありません。これがまあ、陸上の家にたとえたならば、廊下の床にでも当たるかと思つて私はあんな説明をしてあげたので、決していい加減を言つたんぢやない。なに、さかなたちは痛いなんて思ふもんですか。海の底では、あなたのからだだつて紙一枚の重さくらゐしか無いのですよ。なんだか、ご自分のからだか、ふはふは浮くやうな気

がするでせう？」（三三三頁）

「なに、踏みはづしたつて、すくと落下する気づかひはありませんがね、何せ、あなたも紙一枚の重さなんだから。」（三三四頁）

鶉衣不重。羽服似軽。（四七〇頁）

（鶉の衣は羽衣のように軽くなった。―拙訳）

「浦島さん」において、主人公が龍宮を訪れる時、草履を履いているのは、「続浦島子伝記」における「鶉衣」を連想させるであろう。両方ともぼろぼろなつまらない衣類であるの言うまでもない。

一方、中国には人間は神仙になったら、体が異常に軽くなるという考え方が存在する。「続浦島子伝記」における「鶉衣不重、羽服似軽」（鶉の衣は羽衣のように軽くなった）というような表現はそういうことを言っているのではないか。太宰治が主人公の体を「紙一枚の重さ」に表現したのはこの「鶉衣不重、羽服似軽」（鶉の衣は羽衣のように軽くなった）に依つたのではないか。

▼乙姫の容貌に関する描写

①これといふ目立つた粉飾一つも施してゐない乙姫のからだがいよいよ真の気品を有してゐるものの如く、奥ゆかしく思はれてきた。（三三九頁）

雲髪峨々、不加芳澤。花容片々、無御鉛粉。(四七〇頁)

(髪を雲のように結い上げ、香油はつけていない。花のような顔に白粉をつけていない。―拙訳)

「浦島さん」における「目立つた粉飾一つも施してゐない」という表現は「統浦島子伝記」における「不加芳澤」(香油はつけていない)と「無御鉛粉」(白粉をつけていない)を集約したものであると考えられる。化粧しなくても美しいという乙姫の容貌に関する描写は他の浦島説話に見られないから、この表現における共通は偶然ではないと思われる。

②乙姫は身にまとつてゐる薄布をなびかせ裸足で歩いてゐるが、(三三八頁)

神女整衣服歛顔容。而動霧縠以閑登於碧巖。奪氷紈。以徐歩於玉砌。(四七〇頁)

(神女が衣服を整え、顔に化粧を施したあと、霧縠を揺らして静かに碧い巖に登り、氷紈を奪ってゆつくり玉の畳に歩く。―拙訳)

「統浦島子伝記」における「霧縠」と「氷紈」はどちらも極薄い絹である。太宰治はそれを薄い布ととらえて、「薄布」と表現したのではないか。また「浦島さん」における「なびかせ」という

動詞と「統浦島子伝記」における「動」(揺らす)とは、意味合いにおいて似ているのは言うまでもないだろう。

▼竜宮に行く際の感覚に関する描写

①浦島は素直に眼をつぶると夕立ちの如き音がして、身邊ほのあたたく、春風に似て春風よりも少し重たい風が耳朶をなぶる。(三二五頁)

そのうちに、あたりは異様に暗くなり、ごうといふ凄まじい音と共に烈風の如きものが押し寄せて来て、浦島はもう少しで亀の背中からころげ落ちるところであつた。(三二八頁)

如夢如電。(四七〇頁)

(夢見るごとく、稲妻の走るごとく。―拙訳)

「夕立」といえば、夏の夕方に急に降り出す雨で、その特徴は雷を伴いやすいということである。そして雷神が夕方に斎場に降臨することに由来するようである。また、人為の音を除いて、ごう(轟)という音を言えば、すぐ雷鳴を思い出すであろう。太宰治は「統浦島子伝記」における「如電」(稲妻の走るごとく)を読んで、稲妻から雷鳴を連想したのではないか。

②「あなたはどうも陸上の平面の生活ばかりしてゐるから、目標は東西南北のいづれかにあるとばかり思つていらつしやる。しか

し、海にはもう二元の方向がある。すなはち、上と下です。あなたはさつきから、乙姫の居所を前方にばかり求めていらつしやる。ここにあなたの重大な誤謬が存在してゐたわけだ。なぜ、あなたは頭上を見ないので。また、脚下を見ないので。海の世界は浮いて漂つてゐるものです。さつきの正門も、またあの真珠の山だつて、みんな少し浮いて動いてゐるのです。あなた自身がまた上下左右にゆられてゐるので、他の物の動いてゐるのが、わからないだけなのです。あなたは、さつきからずぶん前方にお進みになつたやうに思つていらつしやるかも知れないけれど、まあ、同じ位置ですね。かへつて後退してゐるかも知れない。いまは潮の関係で、ずんずんうしろに流されてゐます。さうして、さつきから見ると、百尋くらゐみんな一緒に上方に浮きました。」(三三四頁)

未知所志之遠近。不悟所遊之東西。(四七〇頁)

(志すところが遠いのか近いのか分からず、訪れようとするとところが東にあるのか西にあるのか分からない。―拙訳)

「浦島さん」に「あなたは、さつきからずぶん前方にお進みになつたやうに思つていらつしやるかも知れないけれど、まあ、同じ位置ですね。かへつて後退してゐるかも知れない。いまは潮の関係で、ずんずんうしろに流されてゐます。さうして、さつきから見ると、百尋くらゐみんな一緒に上方に浮きました」という表現がある。距離を判断するには欠くことのできない対照物のす

べてが浮いて動いてゐるので、前に進んだと思つてゐるが、実際は動いてゐない。あるいは後退してゐるというような、距離が分からなくなる海の世界に関する描写は「続浦島子伝記」における「未知所志之遠近」(志すところが遠いのか近いのか分からず)を敷衍したものではないか。

「浦島さん」では、東西南北および上下の方向の中で迷う主人公が描かれている。一方、「続浦島子伝記」では、東西の方向が不明になる主人公が描写される。いずれにおいても、自分の位置が不明であるという方向感覚の喪失が共通していると言える。

▼竜宮に関する描写

① 亀と並んで正殿の階段の前に立つてゐた。階段とは言つても、段々が一つづつ分明になつてゐるわけではなく、灰色の鈍く光る小さい珠の敷きつめられたゆるい傾斜の坂のやうなものである。(三三六頁)

模糊と霞んでゐるその萬畳敷とでも言ふべき廣場には、やはり霰のやうな小粒の珠が敷きつめられ、ところどころに黒い岩が秩序無くころがつてゐて、さうしてそれつきりである。(三三八頁)

金精玉英敷於丹墀之内。瑤珠珊瑚滿於玄圃之表。(四七一頁)

(金精と玉英は丹塗りの墀に囲まれる神仙の庭に敷きつめられ、瑤珠と珊瑚は玄圃(昆崙山にある神仙の住居)に満ちる。―拙訳)

「浦島さん」において、「鈍く光る小さい珠の敷きつめられたゆるい傾斜の坂」と「廣場には、やはり霰のやうな小粒の珠が敷きつめられ」という表現が見られる。竜宮は、所々に「小さい珠」が満ち溢れている。この「小さい珠」は「続浦島子伝記」における「瑠珠」を踏まえて作り出したのではないか。「瑠珠」は美しい粒状の丸い玉であるが、ここにおいて、海底で生成した珊瑚とともに現れるから、海底生物の貝殻から生成した真珠を思わせるであろう。太宰治は「瑠珠」を真珠のやうなものとらえて、「霰のやうな小粒の珠」と表現したと推測される。「敷き詰める」という動詞が両作に共通するのも偶然ではないだろう。

一方、『古事談』所収の「浦島子伝」にも「瑠珠珊瑚満於玄圃之表」が見えるが、これ以外に太宰治の「浦島さん」と共通する所が全くないから、太宰治は「続浦島子伝記」から影響を受けたと言ったほうが信憑性が高いと思われる。また、『群書類従』所収の「浦島子伝」に「瓊瑠珊瑚満於玄圃之表」が、『扶桑略記』に「瑠樹珊瑚満於玄圃之表」が見えるが、「瓊瑠」や（美玉の総称）「瑠樹」（玉のように白い樹）は太宰治に「霰のやうな小粒の珠」を連想させたとは考えにくい。

②かすかに、琴の音が脚下に聞こえる。日本の琴の音によく似てゐるが、しかしあれほど強くはなく、もつと柔らかで、はかなく、さうしてへんに翳々たる余韻がある。菊の露。薄ごろも。夕空。きぬた。浮寝。きぎす。どれでもない。風流人の浦島にも、何だか見当のつかぬ可憐な、たよりない、けれども陸上では聞く事の

出来ぬ気高い凄しさが、その底に流れてゐる。

「不思議な曲ですね。あれは、何といふ曲ですか。」

亀もちよつと耳をすまして聞いて、「聖諦。」と一言、答へた。

「せいいてい？」

「神聖の聖の字に、あきらめ。」

「ああ、さう、聖諦。」と呟いて浦島は、はじめて海の底の龍宮の生活に、自分たちの趣味と段違いの崇高なものを感得した。（三四頁―三三五頁）

弾一弦之琴。歌万種之曲。霓裳羽衣。（四七一頁）

（一本の弦しかない琴を弾きながら、さまざまな曲を歌う。霓裳羽衣の曲を聞きながら、仙境を逍遥する。―拙訳）

太宰治が「浦島さん」において、菊の露、薄ごろも、夕空、きぬた、浮寝、きぎすなどの曲名を列挙したのは「続浦島子伝記」における「歌万種之曲」（さまざまな曲を歌う）という描写を読んだからであろう。また、「続浦島子伝記」における「霓裳羽衣の曲」は唐の玄宗が夢に月宮の天女の舞を見て、これに倣って作ったものであるから、「不思議な曲」と言つてもいいであろう。一方「浦島さん」における「聖諦」という曲は「霓裳羽衣の曲」とおなじく、「陸上では聞く事の出来ぬ」と描かれている。二つの曲は人間界では聞くことのできないという不思議さにおいて共通しているから、たとえ太宰治の「聖諦」を「霓裳羽衣の曲」に置き換えても、「浦島さん」の文脈からみると、なんの不自然さもないと言わ

ざるを得ない。つまり、太宰治は「続浦島子伝記」における「霓裳羽衣の曲」を踏まえて「聖諦」という不思議な曲を作り出したと思われる。

③これは海の桜桃の花です。ちよつと・に似てゐますね。この花びらを食べると、それは気持よく酔ひますよ。龍宮のお酒です。それから、あの岩のやうなもの、あれは藻です。何万年も経つてゐるので、こんな岩みたいにかたまつてゐますが、でも、羊羹よりも柔いくらゐるものです。あれは、陸上のどんなごちそうよりもおいしいですよ。岩によつて一つづつみんな味はひが違ひます。(三三九頁)

桜桃の花びらだけでは、はじめての人には少し匂ひが強すぎるかも知れないから、桜桃五、六粒と一緒に舌の上に載せると、しゅつと溶けて適当に爽涼のお酒になります。ませ合せの仕方一つで、いろんな味に変化しますからまあ、(三四二頁)

目に見える岩すべて珍味です。油つこいのがいいですか。軽くちよつと酸っぱいやうなのがいいですか。どんな味のものでもありますよ。(三四四頁)

朝服金丹石髓。是分百種千名也。暮飲玉酒瓊漿。亦有九醞十句也。(四七一頁)

(朝に金丹と石髓を食べるが、これにはさまざまな種類がある。

暮れに玉酒と瓊漿を飲むが、これにも亦九醞とか十句とかいうさまざまな種類がある。―拙訳)

「続浦島子伝記」では、仙境の食べ物として、金丹と石髓を、飲み物として玉酒と瓊漿を挙げている。食べ物の種類も飲み物の種類もさまざまあると、その多様さを強調している。それに対して、太宰治の「浦島さん」では、龍宮の飲み物として、海の桜桃の花びらで調合した酒が出てくる。「玉酒と瓊漿」と同じように、不老不死の薬としての働きがある。この酒もいろんな味に変化する。働きにおいても味わいの多様さにおいても、「続浦島子伝記」における「玉酒と瓊漿」と共通すると言えるだろう。また、龍宮の食べ物として、何万年も経っているのに、岩みたいに固まっている藻がある。この藻も岩によつて味が違う。「石」というと、「岩」を連想するのは有り触れたことだから、太宰治は「続浦島子伝記」における仙境の食べ物である「石髓」からヒントを得て、「岩みたいに固まっている藻」を描き出したと推測される。

一方、『古事談』所収の「浦島子伝」、『群書類従』所収の「浦島子伝」及び『扶桑略記』にも「朝服金丹石髓。暮飲玉酒瓊漿」とあるが、仙境の食べ物の多様さを表現する「百種千名」と、飲み物の多様さを表現する「九醞十句」が見られないから、太宰治の「浦島さん」との関連が希薄だと思われる。

総じて言えば、太宰治が「浦島さん」の執筆に際して、有力な底本の一つとして「続浦島子伝記」を参照したのはほぼ間違いないと思われる。

三、太宰治の漢文力

「続浦島子伝記」は漢文で書かれたものであるが、「浦島さん」の執筆時期までに、日本語訳は存在していなかったようなので、太宰治がこの漢字だけの文章を読めたかどうかという疑問が出てくるだろう。次に太宰治の漢文力について考察してみよう。

小学校に漢文科目は設けないので、中学校から考察しよう。太宰治は大正十二年から昭和二年までの四年間、旧制青森中学校に、昭和二年から昭和五年までの三年間、旧制弘前高等学校に在学していた。百瀬孝の『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』（注4）によると、明治三十四年から昭和六年まで、中学校に漢文科目が存在していた。そして全時間で占める比重がきわめて高いようである。

一方、太宰治の弘前高等学校に在学中の履修科目（注5）は次のとおりである。

昭和二年……修身・国語・漢文・英語・独語・国史・地理・
数学・自然科学・体操
昭和三年……修身・国語・漢文・英語・東洋史・西洋史・心
理・法制・自然科学・体操
昭和四年……修身・国語・漢文・英語・西洋史・哲学・論理・
経済・体操

弘前高等学校に在学していた三年間、どの学年の履修科目にも漢文が見られる。つまり、太宰治は青森中学校と弘前高等学校に

在学中の七年間、ずっと漢文を勉強していたはずである。

太宰治は『聊齋志異』に取材して「清貧譚」と「竹青」二篇の翻案物を書いた。参照した底本は田中貢太郎訳『聊齋志異』（昭和四年、北隆堂書店）である。訳文の後ろに漢文の原文が載っている。

太宰治は「清貧譚」の前書きで「以下に記すのは、かの聊齋志異の中の一編である。原文は、千八百三十四字、之を私たちの普通用ゐてある四百字詰の原稿用紙に書き写しても、わづかに四枚半くらゐの、極く短い小片に過ぎないのであるが、読んでゐるうちに様々の空想が湧いて出て、優に三十枚前後の好短篇を読了した時と同じくらゐの満酌の感を覚えるのである。」と言っている。原文は読まなければ、その字数を正確に把握できないだろう。

一方、『聊齋志異』の「竹青」の原文に「別来無恙」という表現がある。田中貢太郎はそれを「お別れをしてから、御無事でしたか」と翻訳しているが、太宰治はその文句を訓読そのままの「別来、恙無きや。」と表現している。このことに依つても、太宰治が「聊齋志異」の原文を見たことはほぼ間違いないと思われる。

また、小山清の「風貌——太宰治のこと——」の「私が初めて太宰さんを三鷹の家に訪ねたのは、太宰さんが甲府から三鷹へ移つた翌年で、昭和十五年の十一月の中旬であつた。ちやうど太宰さんが新潟の高等学校から招かれて、講演に行く直前であつた。（中略）／＼その日太宰さんの机の上には、田中貢太郎訳の『聊齋志異』の原文の箇所がひらかれてあつた。翻訳をしてゐるのかと問ふと、翻案をしてゐるといふ答であつた。翻案といふ言葉は使はなかつ

たが。「黄英」に取材した「清貧譚」を執筆されてゐたのである。原文を読んでみると色々空想が湧いてきて楽しいと云つた（注6）という一節も太宰治が『聊齋志異』の原文を読んでいたことを裏付けているのではないか。

おわりに

七年間にわたる学習履歴と『聊齋志異』の原文が読めることから、太宰治の漢文力を推察できるであろう。つまり、「浦島さん」の執筆に際して、太宰治は『群書類従』所収の「統浦島子伝記」における蓬萊山に関する描写に基づいて、独特な龍宮像を描き出したのではないか。いずれにせよ、『群書類従』所収の「統浦島子伝記」は太宰治の「浦島さん」の有力な粉本であるのは間違いないと思われる。

〔付記〕 太宰治の参看した『群書類従』の版本を特定するのは困難であるため、本論における「統浦島子伝記」の引用は「浦島さん」の執筆時点では最新の昭和六年版に拠った。

注

（注1）『太宰治全集』第八巻 筑摩書房 一九九八年十一月 二九八頁

（注2）『浦島子伝』 現代思潮社 昭和五十六年一月

（注3）『群書類従』 江戸時代の埴保己一の編。日本古今の書冊

を編集合刻したものの。その数千二百七十三種を五百三十巻とし、二十五類に部門分けしている。なお、別に統群書類従があり、群書類従に入らないものを収集網羅し、二千三百種を収めている。

（注4）吉川弘文館 平成二年二月

（注5）弘前大学附属図書館編「官立弘前高等学校資料目録―北溟の学舎の資料群―」 弘前大学出版会 二〇〇九年六月 二四頁の表二―一による。

（注6）『太宰治全集』第十二巻 筑摩書房 一九九九年四月 五六〇頁